会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

麻酔科医は、何も起こらない一日をつくる

札幌医科大学医師会
札幌医科大学附属病院
山蔭（やまかげ）　道明（みちあき）

麻酔科医として長く仕事をしてきた。大学教授となり、日本麻酔科学会の理事長を務め、本年は日本麻酔科学会第73回学術集会を横浜で開催した。先日、永年勤続表彰も受けた。こうして書き並べると、それなりに長い年月を歩いてきたことを実感する。しかし、定年という言葉が少しずつ現実味を帯びてきた今、改めて自分の仕事を振り返ると、最も心に残っているのは華やかな出来事ではない。

むしろ、「何も起こらなかった一日」である。

朝、患者さんが手術室に入り、麻酔を導入する。手術中の循環や呼吸を管理し、必要な薬剤や輸液を調節する。手術が終われば麻酔から覚醒していただき、病棟へ帰っていただく。もちろん実際の麻酔管理はそれほど単純ではない。時には予想もしない事態が起こり、一瞬の判断が患者さんの予後を左右することもある。

それでも私たちが目指しているのは、結局のところ「何も起こらないこと」なのだと思う。

患者さんにとって、手術を受ける日は人生の中でも特別な一日である。一方、麻酔科医にとっては、それが毎日の仕事である。この両者の間にある大きな隔たりを忘れてはいけない。私たちにとって日常である一回の麻酔も、患者さんにとっては大きな不安を伴う出来事かもしれない。その一日を安全に終え、翌日を迎えていただく。それが麻酔科医の仕事の原点である。

麻酔科医の仕事は、うまくいけば目立たない。手術が無事に終わっても、患者さんが担当した麻酔科医の名前を覚えていないことも珍しくない。しかし、それでよいのだと思う。

麻酔中に大きな出来事がなく、痛みや不快な記憶も少なく、患者さんが普通に病棟へ戻っていく。その「普通」をつくるために、私たちは知識を学び、技術を磨き、万一に備える。何も起こらなかったという結果の背後には、多くの判断と準備がある。

これは大学の仕事にも少し似ている。

若い頃は、自分が何を成し遂げるかを考えていた。研究成果を出したい、新しいことを始めたい、教室を発展させたい。教授になってからは、一人の医師として良い仕事をするだけでなく、若い医師が挑戦できる環境をつくり、その成長を支えることも大切な仕事になった。

以前は、教授とは多くのことを知り、答えを示す人だと思っていた。しかし実際には、答えを与えることより、一緒に考えることの方が大切な場面も多い。時には一歩引いて若い人に任せなければ、人は育たない。その加減は今でも難しい。

学会活動に長く関わり、本年の学術集会でも多くの若い麻酔科医が発表し、熱心に議論している姿を見た。その光景は頼もしく、同時に、自分たちの世代の役割が少しずつ変わってきたことも感じさせた。医学の世界では、次の世代が前の世代を越えていかなければ進歩はない。

そう考えるようになると、「自分が何を残すか」という問いへの答えも変わってきた。

論文や業績、役職は形として残る。しかし、本当に残したいものはそれだけではない。自分が教えた医師が患者さんを大切にし、次の若い医師を育て、その医師がさらに次の世代を育てていく。その連鎖こそが、大学人として最も大切な仕事なのではないかと思う。

医学の知識や技術は驚くほど速く変化している。私が麻酔科医になった頃の常識の中には、すでに過去のものとなったものも少なくない。これから人工知能をはじめとする新しい技術が医療に入れば、診療の姿はさらに変わるだろう。

それでも、患者さんの前で考えること、分からないことを曖昧にしないこと、仲間と協力すること、そして安全を最優先することは変わらない。こうした姿勢を、日々の診療や教育を通して次の世代に伝えていくことが、これからの自分の役割だと思っている。

定年までは、まだ少し時間がある。診療も研究も教育も、もうしばらく現役として続けたい。ただ、以前ほど自分が先頭に立つことにはこだわらなくなった。

少し後ろから若い人たちの背中を見る。それもまた、この年代になった医師に与えられた役割なのかもしれない。

大きなことを成し遂げる一日も大切である。しかし医療を支えているのは、その何倍も積み重ねられた「何も起こらなかった一日」である。

これからも一人の麻酔科医として、そんな一日を静かにつくり続けたい。